T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

# 論文 / 著書情報
# Article / Book Information

| | |
|---|---|
| 題目(和文) | 東京近郊における建築と自動車の境界にあらわれる空間構成 |
| Title(English) | |
| 著者(和文) | 吉村英孝 |
| Author(English) | hidetaka yoshimura |
| 出典(和文) | 学位:博士（工学）,<br>学位授与機関:東京工業大学,<br>報告番号:乙第4106号,<br>授与年月日:2014年12月31日,<br>学位の種別:論文博士,<br>審査員:塚本　由晴,藤岡　洋保,安田　幸一,奥山　信一,山﨑　鯛介,村田　涼 |
| Citation(English) | Degree:,<br>Conferring organization: Tokyo Institute of Technology,<br>Report number:乙第4106号,<br>Conferred date:2014/12/31,<br>Degree Type:Thesis doctor,<br>Examiner:,,,,, |
| 学位種別(和文) | 博士論文 |
| Category(English) | Doctoral Thesis |
| 種別(和文) | 審査の要旨 |
| Type(English) | Exam Summary |

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

別　　紙　1（論文博士）

# 論文審査の要旨及び審査員

（2000字程度）

| 報告番号 | 乙 第　　号 | 学位申請者 | 吉村　英孝 | |
|---|---|---|---|---|
| 論文審査員 | 氏　　名 | 職　　名 | 氏　　名 | 職　　名 |
| | 主査　塚本　由晴 | 准教授 | 山﨑　鯛介 | 准教授 |
| | 藤岡　洋保 | 教授 | 村田　涼 | 准教授 |
| | 安田　幸一 | 教授 | | |
| | 奥山　信一 | 教授 | | |

本論文は「東京近郊における建築と自動車の境界にあらわれる空間構成」と題し、以下の７章から構成されている。

第１章「序論」では、研究の背景、目的と意義、研究の事例と方法、従来の研究との比較、及び論文の構成について述べている。我が国において自動車が普及するようになって既に半世紀以上が経過したが、このあいだに東京の都市空間も自動車の存在を前提に整備が進められてきた。その内容を自動車の「移動」を円滑にする道路の整備と、それを「滞留」させる駐車場の整備に大別した上で、自動車の「滞留」を受け止めることを、現代の建築が共有する条件として捉え、そこに自動車と建築の境界に成立する空間があることを指摘し、自動車の存在を抜きに語る事ができない建築物や建築群として、自動車斜路付き立体駐車施設、大型ショッピングセンター、ロードサイドの建築物群、郊外住宅地についてのフィールドサーベイを行い、各事例群に固有の構成要素の分節と統合を検討して構成類型を明らかにすることを通して、建築と自動車の境界にあらわれる空間の体系化を行うところに本論文の目的があると述べている。

第２章「自動車斜路をもつ建築の構成」では、自動車「斜路の形態」を、地上から離れた床に到達するために必要な斜路の長さが建築物の輪郭に合わせて、折り畳まれ、重ねられる変形として、また駐車場の立体化に伴って派生した階と建築物全体の構成を、その位置、及び斜路の接続から捉え、それらの組み合わせから自動車斜路付き立体駐車施設の構成類型を抽出することにより、その外観を特徴づける斜路の形態は、階が斜路を統合するか、斜路が階を統合するかといった、建築物と斜路の接続における統合関係に依存すること、さらに建築物用途との結びつきには一定の傾向があること、立地との結びつきは敷地の埋立て時期と相関があることを明らかにしている。

第３章「郊外型大規模商業施設の外部空間の構成」では、自動車が滞留する「駐車空間」と人が歩行する屋外の「遊歩空間」の構成要素を、建築物壁面との関わり、及び規模、形態から整理し、それらの組み合わせから大型ショッピングセンターにおける外部空間の構成類型を抽出することにより、その外観を特徴づける構成要素は、首都圏の中心地域では立体、周縁の地域では平面としてあらわれ、それぞれ一部の要素の出現のしかたに、建設年代との相関が見られるという立地を反映した系譜的な展開が認められることを明らかにしている。

第４章「郊外主要幹線道路における沿道建築物の構えと街並み」では、建築物立面の構えのタイプを壁面の種類と分節のされ方、及び付加される要素の組み合わせとして捉えるとともに、建築物の配置を平面駐車場との敷地間口の占有／分割として捉え、それらの関係から沿道建築物の構えの構成類型を抽出し、その建設年代毎の敷地間口幅、建築物用途との結びつきを世代的特徴として比較することにより、ロードサイドの建築物群による街並みは、世代に関わらず一定の敷地規模を条件として繰り返される構えと、世代によって異なる敷地規模に呼応して繰り返される構えに分けられることを明らかにした上で、これら新陳代謝する構えの集積としての街並みを記述する方法を提案している。

第５章「自動車の取り扱いからみた住宅の構えと住宅地の街並み」では、街並みの連続立面から、住宅の構えの構成単位でもある間口単位を分節し、その性格を建築物要素と空地要素、及び境界要素の奥行き方向の順列から捉え、それらの関係から住宅の構えの構成類型を抽出し、その敷地間口幅と、それに対する駐車用途の間口単位の幅比を比較することにより、郊外住宅地の街並みは、敷地間口幅が広く構えの大半を緑化の要素が占める第一世代、敷地間口幅が中程度で構えのバリエーションが豊富にみられる第二世代、敷地間口幅が狭く構えの大半を自動車の滞留が占める第三世代に分けられること、さらにこれらの配分として見た類推的街並みは、接道方位に影響を受けることを明らかにしている。

第６章「建築と自動車の境界空間」では、各章における建築と自動車の境界にあらわれる空間構成を比較することにより、建築物用途の違いを超えて共通する自動車の滞留の在り方は、自動車斜路付き立体駐車施設と大型ショッピングセンターに共通する「立体化する自動車の空間」、大型ショッピングセンターとロードサイドの建築物群に共通する「道路から商業施設までの自動車の空間におけるシークエンス」、ロードサイドの建築物群と郊外住宅地に共通する「反復される自動車の空間」という３つの「建築と自動車の境界空間」の体系としてまとめられることを明らかにしている。

第７章「結論」では、第２章から第６章までの各章で得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。

以上を要するに、本論文は、東京のフィールドサーベイによって抽出された、自動車の存在を抜きに語る事ができない建築物や建築群のケーススタディを通して、現代の建築物に共有された条件である自動車の滞留を受け止める建築と自動車の境界空間の体系を明らかにするものである。その成果は、都市空間と建築物を同位相で分析、構想する建築デザインの方法論を導出するものであり、建築意匠論の都市デザイン論への展開に寄与するものと考えられる。従って、本論文の成果は、建築学、及び工学に貢献するところが大きく、博士（工学）の学位論文として十分に価値あるものと認められる。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。